
魔法海兵リリカル中将!?(改訂)

カンバン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法海兵リリカル中将！？（改訂）

【Nコード】

N3878Q

【作者名】

カンバン

【あらすじ】

とある海兵2人が拾った石が異世界に嵐を巻き起こす！！

前作の作品の大幅改訂版です

異世界へゴー！（前書き）

前作のリリカル中將を大幅に改めた物です

能力の変更など色々変わっていますがご覧くださればありがたいです

異世界へゴー!

マリンフォード…未だ最終戦争の傷跡が残るここで2人の男性が歩いていた

「……なんとかなったか…」

大柄な十手を構えた男…スモーカーが言った

「だがセンゴクさんが退任なさるとはなあ…」

スモーカーより背が高いドラッグーが言った

若き中将のドラッグーは友人のスモーカーと一緒にブラブラ散歩していた

そんな中道端に赤い綺麗なナニカが合った

「あ…なんだありゃ?」

スモーカーが言い出した

「ん?……宝石か」

俺は歩き出しヒョイとつまみ上げた

見れば見るほど美しいなコレ

「なんか…光ってねえか?」

……マジでそうだな、おい逃げ出そうとすんな

「おい!ますます光ってんし体が引きずり込まれそうなんだけど!」
「?」

スモーカーが本気で逃げ出そうとしてるし!

逃がすか!!

「てめえ!!はなしやがれ!!」

「バカが!一緒に行こうぜ…!!…!!…!!友達だろ?」

「今は関係ねえよ!!!離せバカ!俺だけでも生き残る!!!」
「がやっぱり吸い込まれる訳で…」

「「ぎいやあああああああ!!」」
シュポンツと吸い込まれ消えてしまった

所変わってクラナガンの都市部

魔導師ギンガ・ナカジマは敵を粉碎していた
その時：遙か上空に強烈な光が発生した

「何なのこれ!？」

ギンガも犯罪者達も一気にバックステップを踏んだ
そして

「「ギヤアアアアアアア!」」

と2つの人影が頭から落下した
そして地面に激突

「ヒッ!!」

白煙が立ち込めた
犯罪者がへたりこむ

辺りにナニカが飛び散る

ギンガの頬にもあたり恐る恐る拭うと：

「……土砂：泥？」

その土砂が突然動きだし白煙の中心へ
また白煙も中心へ集まりだした

そして：

片や2mの巨漢

相方の方は2m半ばの超巨漢!!

『生きてるうううううううう!？』

全員が絶叫した

「おい：ここどこだスモーカー？」

超巨漢が相方に話し掛ける

「知るか：聞けばいいだろ、グランドラインのどっかだろ：多分」
そしてスモーカーは辺りのビル群を見渡した

「おいドラッガー？新世界にこんな建物合ったか？お前の方が長いだろ」

ドラッガーは首をかしげた

「見たことないな…バルジモアか？だが冬服じゃないようだな」
ぐるんと2人はギンガの方を向いた

「「おい、グランドラインのどこだここは？」」

見事なシンクロだ

「……申し訳無いですがグランドラインなんか知りません、ってそれよりも逃げてください！！」

ギンガは避難を呼び掛けた

「いや…逃げろと言われても…向こうさんは敵なのか？」

ドラッガーはのんびりと言った

「そうです！！いま向こうの犯罪者はあっけに取られてますが早く！」

スモーカーは葉巻を吸って言った

「ドラッガー…話をする前にあいづらが邪魔らしい」

ドラッガーも拳を鳴らした

「一瞬で終わらせれば大丈夫だろ…」 厳武銃」

ドラッガーが掌を向けた瞬間…大量の石がマシンガンの如く掌から襲いかかった

『ギャアアアア！！』

手足に大ダメージを受けている

高速の石は弾丸と変わらない

「これでおしまいっ」と…」

更にスモーカーが手を煙にして捕縛した

「あ…貴方達は？」

ギンガは尋ねた

「俺はモクモクの実を喰った煙人間、白狼のスモーカーだ」

「同じくドシャドシャの実を食べた土砂…平たくいえば泥人間、懐

土のドラッガーだ」

ギンガは思った

「取り合えずこの人達を私達と同じ”人類”と言うカテゴリーに入れて良いのだろうか」

まあ魔法が使える自分が言うべき台詞ではないが

「時空管理局のギンガ・ナカジマと申します、取り合えず来ていただけますか？何故ここに来たのかも含めて…」

ギンガは頭の中で厄介な事になると考えながら大柄な人が果たして隊舎に入るのか考えていた

異世界へゴー！（後書き）

能力変更

自然系ドシヤドシヤの実

土砂、泥人間になる

攻撃を石混じりの泥になって無効化する

石を発射することも可能

弱点は乾燥

攻撃無効化と能力攻撃不可となるため危険

一応大気から水分を取り込んで回復できるが時間がかかり致命的

超人との遭遇（前書き）

邂逅しました

超人との遭遇

「あんな石拾わなければ良かった…」

ドラッガーと言う人が落ち込んでいます

「何時になったら帰れるか分からないのはな…」

スモーカーと言う人もショボンとしています

「……こっちだって泣きてえよ…」

父さんにして部隊長のゲンヤが言いました

取り合えず解ったことは

1、石を拾って飛ばされたらしい

これはレリックかロストログアの欠片の様です

スバルが昨日行った機動六課に回す予定です

2、身体能力が人外…と言うより生身で魔導師より強い

隊舎入り口に違法駐車の上自動車がありました。がドラッガーさんは片

手で” 投げ上げて” から両手で運び始めました

3、体の構造がおかしい、けど人間

煙人間と泥人間

ナイフを刺そうが頭をぶち抜かれようが、腕が千切れようが無傷らしい

何なのソレ

4 異世界の海軍の尉官どころか佐官ですらなく将官

ドラッガーさんが中将

スモーカーさんが准将だそうだ

ドラッガーさんは見事に出世街道に乗って

スモーカーさんはアウトローだったからこうらしい

問題は山積み：

「取り合えず衣食住は保証してもらえるのか？」

ドラッガーさんが訪ねてきた

「ええ：ちゃんと保証しますし：お二方がちゃんと帰れるように捜索しますから」

問題はこの人達の戦力だろう

身体能力は人外だから聞かなくても分かる気がするけど……

「貴殿方ってその何ができますか？」

ドラッガーさんは悩んでいった

「戦艦を拳一発で破壊できるな：あとはそうだな：空が飛べる」
へ？

「ドラッガーさんは飛べるんですか？どうやって！？」

回りの人も父さんも驚いている

「どうやってって言われてもな：空気を蹴って右足が落ちる前に左足で空気を蹴って：って感じだな：こんな感じだ」

聞かなきゃ良かった

嘘だと思いたいけど目の前の空中でバインバインと跳ねながら空に浮かぶドラッガーさんが要るのだから

……：ますます人類と言うカテゴリーに入れていいものだろうか

「俺は煙になれるからどこへでも入れるな、あとは纏めて敵を捕縛できる」

聞きながら父さんが私に言いました

「……レジアス中將に伝えた方がいい：こりゃ俺達がどうにか出来る状況じゃない」

それはそうだ

多分私達じゃどうしようもない

「……………頭が痛くなってきた……」

ワシは呟いた

危険すぎる

何で生身の人間が自動車を投げ上げる

高高度から落下しても無傷…

何なんだいったい

はつきり言うとな今彼等が暴れれば地上本部は押さえきれない

…機動六課に押し付けるべきだな

忌々しいが戦力は充分出しな

「で…来たわけだが…取り合えずどこが入り口だ？」

「さあな…ガラスは窓だろ？」

地上本部の職員はサッサと帰ってしまった

仲が悪いのか？

2人が困るのも無理はない

そもそも海軍本部には自動ドアがない

ベガパンクの研究室やバルジモアにはあるだろうが彼等を見る事が殆ど無い

「……ぶち壊すか」

即決だった

「やめとけ…かしどう入るんだ？」

2人は立ち往生していた

「遅いなあ…」

はやてはぼやいた

「地上本部では危険すぎる…ってねえ…」
なのはが言う

「大人しいらしいけどねえ…」

フェイトが言った

しかしとても遅い

近くにいたグリフィスが動いた

「ちよつと見てきます…文化レベルが低い地域の時限漂流者かも知れないですから」

グリフィスは走り出した

そして…数分の内

「ぎやあああああああああああああ！！！」

悲鳴が聞こえた

「何があつたんや！？」

はやて達は走り出した

途中でシグナム達と合流し辿り着き見たのは
腰を抜かしたグリフィス君

そして何だか困っている…大きな人と確実に3m近い巨漢が！！

『巨人だあああああああああ！！！』

「いや…俺達は巨人族じゃないんだが…」

「聞こえてねえぞドラッガー」

2人は暫しの間立ち尽くしていた

煙と泥と金と黒そして桃（前書き）

出来ました！

煙と泥と金と黒そして桃

「ようこそ六課へ：私は八神はやて言います」

かなりちっこい女の子が言い出した

が目は笑ってないな

…なるほど青キジさんに似てるんだな

さて：油断はいかんね

取り合えずメシは確保せねば

なんや：えらい圧迫感や

気を付けとかんと：

ドラッガーが飯を最優先にしている等とは梅雨とも知らないはやてであつた

「……と言うわけでこの石を拾ったら飛んできたわけだ」

俺は紅い石を示しながら言った

「ふゝむ：やっぱりロストロギアかな？ フェイトちゃんは？」

「なのはの言う通りだと思うよ、たまたま落ちてたのか…」

…落ちてた石が化け物で俺達は飛んできたんかい？ 「……なあ葉巻吸っていいか？」

「取り合えず止めろスモーカー」

「隊舎は禁煙です！！」

フェイトとやらの声にスモーカーが叫ぶ

「何だと！？ ここで吸えねえのか！？」

スモーカーの豹変に3人が引く

「スモーカー：取り合えず落ち着けよ後でも吸えるだろうが」
がスモーカーがギロリと睨み付ける

「ドラッガー：てめえ俺が何人間か知ってんだろうが…」

スモーカーは煙人間だ

なので定期的に吸わなければ行けない
がついさっき入る前に吸ったばかりの筈だ

「ついさっき吸っただろうが…や」「うるせえ大酒のみ」んだとコラ
俺は土砂：つまり泥人間なので水分が不可欠だ
なので毎日大量の水分が必要なのだ

「いつもいつもどこでも吸おうとするんじゃないやねえよ！！それだから
昇進できねえんだよ！」

「んだとお…！？てめえこそ中将なのに安酒ばっか飲んで二日酔い
が多いじゃねえか！！！」

『あの〜』

3人が声を揃えるが聞いちゃいない

「「やんのかコラア！？」」

スモーカーの顔面が弾け飛びドラッガーの腹が吹き飛んだ

「ひい！？」

なのはは息を飲んだ

目の前で人の一部が完膚なきまで吹き飛んだのだ
だが：

「え…」

はやてが止まった

血 が と び ち ら な い

煙が舞い上がり泥が飛び散ってる

「「「…おばけだあああああああああ！！！！！！」」」
3人が同時に叫んだ

ドラッガーとスモーカーはケンカをやめて言った

「「え！？おぼけはどこだ！！」」

『アンタ等だアアアアアアアアアアアア！！』

気持ちには分かる

だがコイツらに常識は通用しない！

「ん？ああ俺は土砂人間だからおぼけじゃない」

「俺は煙人間だ」

『はあ？』

はやて達が尋ねてくる

「ん？この世界に悪魔の実は無いのか？だとしたらどうやって空を飛んでいる？」

人が空を飛んでたりしたから新種の実があるもんだと思ってたんだが六式にしては足が動いてないし動きが滑らかだったしな

「物騒な名前の実ですね…そんな物はありません、多分飛行魔法を使っただと…」

俺はその言葉を聞いて自分の顔をぶん殴った
当然再生する

「……魔法使いだっただのか…絵本の中の住人だと思ってたんだがな…」

スモーカーがぼやく

ぶん殴っても再生するので現実だなうん

「と言いますか…悪魔の実って？」

フェイトが再び訪ねる

「体を劇的に変化させる木の実で食ったら大抵の場合は強くなれるな」

スモーカーは言う

「……食べたなら体を煙と土砂に変化できる体になってたん!？」
はやてが突っ込んでくる

「おう、ほら見てみる」

俺は手首を変化させ土砂にした

「うわぁ…ホントに変わってる…」

なのはがビビりながら頷いている

元のように腕を戻した時ははやてが言った

「取り合えず元の世界へ帰るまでの間、私達が責任をもって保護しますので……あぁ!もちろん個室ですし自由にしてもらって構いません」

至れり尽くせりだな

「俺は大食いなんだが…大丈夫かね?」

はやては笑った

「大丈夫です!…既に2人化け物居ますから」

なら良かった…一安心だ

「なぁ葉巻は「隊舎の外の喫煙所で!!」……クソツ」

スモーカーは悔しそうだ

こうして俺達は機動六課に厄介になることになった

オマケ

「ベッドが小さくて寝にくいな…」

身長2m66?の体格で一般隊士様ベッドはキツイようだ

煙と泥と金と黒そして桃（後書き）

2人は仲が良いです

ちなみにガチで戦うと六式を習得しているドラッグーの勝ちです

魔法？いいえ体術です

清々しい朝

俺は早速立ち上がり

「あっだ！！」

天井に頭をぶつけた

「天井が低すぎるぞ…気を付けなきゃな」

ただ単にドラッガーがデカイだけである

近くに昨日洗濯機？で洗ってもらったブラウンのスーツを着て正義のコートを羽織る

武器の類は手錠くらいでありそれも預けている
もう1つあるにはあるが武器には見られないだろう

ドラッガーは剣術の才は0なため六式による白兵戦と能力を用いた殲滅戦を得意にしている

そんな彼だが…

「音がするな…アッチか？」

音…というか何かが碎けるような音が響く
そして見た

「……パシフィスタ！？」

形状と強度はかなり違うようだがレーザーを出している機械人形を
発見した

近くに壊れた残骸が転がっている

力を入れたら楽に壊れた

「……ベガパンク博士がいたら飛び付くんだろうな、案外ガープさん
もこういうの好きだしな…」

呟き歩いていたら機械人形をブツ倒している少年達がいた

（ふゝむゝパワーは青髪の子はあるみたいだし赤髪の子はかなり速
い…剃を使わんと追い付けんな、ピンクはよく分かんが橙が良い
仕事してるな…指揮官の才はあるな）

だが近寄りすぎたのか一体の機械人形が物陰から飛び出してきた！！

「なんでアソコに！？」

なのはは叫んだ

新人達の訓練は始まったばかり

まだまだ目が離せない

なんでいきなりあんなところに！？と思いたくもなる

いくら不死身の土砂人間だからといってレーザーを食らったら不味い

「アクセル…」

なのはは瞬時にスフィアを形成し放とうとした瞬間

ドカアアアン！！

鋼の塊がすっ飛んでいった

「へ？」

なのはは思わず首をかしげた

「ん？飛びすぎたか？」

ドラッガーは出てきた瞬間に蹴りを食らわした

ご丁寧に鉄塊付きで

まるでサッカーボールのように飛んでくガジェットの残骸

「…………アレ？魔導師じゃなかったよね？」

なのはは首をかしげた

新人達も漂流者を保護したことを知っていた

なのはが動いた時自分達も動こうとした

けどこれである

「…………ティア？」

「ごめん…説明できない」

ガジェットは人間が素手で立ち向かえるようなものではないのだ

「ドラッガーさん！なんでこんなところに！？」

なのはが降りてきた

「いや…音がしたからフラツと…」

目が笑ってないな

「危険なんですから立ち入らないで下さい！！」

「ブツ壊したアレが！？あんなに脆いのに！？」

「脆い！？そんな訳ないでしょう鉄の塊ですよ！」

「いや俺の世界だったらあのくらいの蹴りを平気で耐える奴ゴロゴロいるぞ！？」

一億越えのルーキーなら食らってもまず起き上がるだろう

「どんな人達なんですか！？」

「ん？大仏人間にマグマ人間、光人間に…変わったところで檻人間にクモ人間とか」

「何なんですかそのビックリ人間博覧会は！？」

「みんな同僚だよ？上司とか同期とか先輩」

「……言葉が通じないよ」なのはは異文化交流の難しさをしった

その頃スモーカーはゆっくりと起き出した

いつもの格好に着替え外に出る

すると昨日部屋に案内してきた女性がいた

「おう：シグナムだったか？」

シグナムは振り返った

「む：スモーカーだったなおはよう」

訓練してたのかうつすら汗を掻いている

「朝から訓練か？」

「ああ、騎士足るもの訓練はかせないからな」

スモーカーは堅物でやや天然気味の友人を思い浮かべた

「そりゃご苦労だな」

スモーカーは歩き去ろうとして気が付いた

「朝飯どこで食うんだ？」

シグナムは笑っていた

「コッチだついてこい」

ドラッガーは説教から解放された後海岸でやすむフォワード陣と仲良くなった

堅物だが元々人当たりは良いので打ち解けやすいのだ

「スバルは格闘技やってるのか：俺もやってるぞ」

「え！！そうなんですか？」

疑うスバルに拳をみせるドラッガー

「うっわあ：凄いですね」

長年鍛えてきたせいで拳はゴツゴツした凶器だった

「凄いだろ？こんなのも出来るぞ」

ドラッガーは10m程にあった枯れた流木に向かって蹴りを放った
すると青っぽい衝撃波がそれを真っ二つにした

「……………なんですかソレ？」

ティアナは声を絞り出した

「ああ：嵐脚と言ってカマイタチを起こしてブツた切るんだ」
フォワード陣は思った

ソレ格闘技の技じゃねえと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3878q/>

魔法海兵リリカル中将!?(改訂)

2011年10月6日23時59分発行